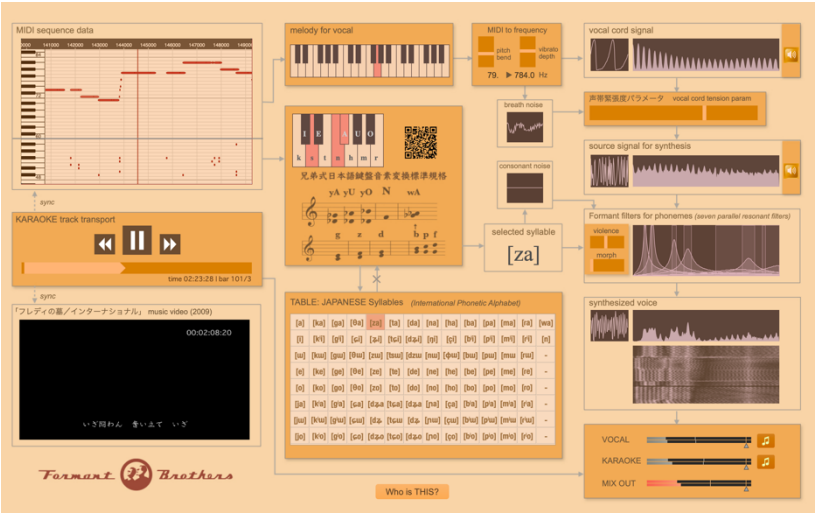
フレディの墓あばき／インターナショナル

La révélation du Tombeau de Freddie / L'Internationale（2009／2024）

フォルマント兄弟は、2009 年に『フレディの墓／インターナショナル』（*Le Tombeau de Freddie / L'Internationale*）という作品を発表した。1991 年に死亡したロック歌手フレディ・マーキュリーの歌声を真似た人工音声を作り、共産主義革命歌「インターナショナル」を日本語で歌わせるもので、YouTube に投稿したミュージックビデオと、Web から入手できるコンセプトテキストの 2 点で構成されていた。なぜフレディなのか、なぜインターナショナルなのかについては、そのテキスト「デジタル・ミュージックにおける 6 つのパースペクティブ」をお読みいただきたい。

今回新たに作り直した本作は、その歌声の再現である。ただしヘッドフォンから聞こえる歌声は、2009 年の録音ではなく、当時のプログラムを動かし、今この場で「生成」しているものだ。展示された PC の画面は、その生成プロセスの流れをダイアグラム図として視覚化している。つまり本作は「フレディの墓」を掘り返し、内部を見せる「墓あばき」である。さらに新しい試みとして、本作では鑑賞者が歌声の生成に介入できるようにした。PC 画面のオレンジ色の部分をマウスで操作してみてほしい。死者の声帯に触れることができる。



生成プロセスを簡単に説明すると、まず鍵盤情報（デジタルの音符）としてデータ化された歌のメロディと歌詞を読み出し、メロディ情報によってブザー音のような声帯信号の音の高さをコントロールしている。低い音域の鍵盤情報は、兄弟式日本語鍵盤音素変換標準規格（和音で日本語のすべての音節を指定できる規則）を通じて、アイウエオやガギグゲゴなどの音節ラベルに置き換えられる。このラベル

がデータベースから各音節のフィルター・データを呼び出し、声帯信号を変化させ、フレディの歌声を生成しているわけだ。

2009 年から 15 年が経ち、とくにこの 2 年間の「生成ＡＩ」をめぐる世界的なニュースによって、「生成(generate)」という言葉は身近なものになった。また、そうしたテクノロジーを使って実在の人物そっくりに作り出された画像や音声は「ディープフェイク」と呼ばれ、政治的・倫理的に悪用が危険視されるようになっている。兄弟は、こうしたＡＩや機械学習等による自動生成の技術はいっさい使っていない。それどころか本物のフレディの録音断片すら使っていない。彫刻家が石を削るように、無機質な機械音から、声に似た音響をフィルターで削り出しているだけだ。そのフィルターの設定は、兄弟が膨大な手間と時間をかけて自身の手と耳で試行錯誤しながら見つけたものである。

それゆえ、一聴してわかるとおり、この歌声は明らかに機械的であり、本物の人間と聞き間違えるようなリアリティは持っておらず、およそディープフェイクと呼べるものではないだろう。それは、フレディの肉声の写真的な（あるいは録音的な）「うつし」ではなく、似顔絵や漫画のように、ある特徴を取り出しては誇張し、それ以外を省略してしまう戯画に近い。もし「似ている」と感じたとすれば、それはメディア体験を通じてあなたの記憶に刻まれた「あのフレディの歌声」の「うつし」が共鳴したからであろう。

もう一歩踏み込もう。声は聴くものではなく、聞こえてしまうものである。この認知過程は自動的であり、意識によってコントロールできない。たとえチープで機械的な人工音声であっても、それを聞くあなたの中に起こっていることを注意深く観察してほしい。歌手の息づかい、喉のふるえ、口の運動、胸の張りなど、彼の肉体の「うつし」が、自分のなかで微かに運動してはいないだろうか？ 認知科学におけるミラーニューロン説によれば、人の声を聞いているときの脳は、聴覚部位だけでなく発声運動に関わる部位も活性化するという。老若男女、音響的にはまったく異なったさまざまな他者の声であっても等しく聞き取れる理由は、声を発している他者の身体に共感し、その「うつし」を神経細胞レベルで受け取り、鏡像のように自身の潜在的な発声を同期させているからだという。だとすれば「声」ほど神秘的な現象が他にあるだろうか。フォルマント兄弟の長年の活動は、人工音声の作品を通じて、その神秘に触れようとしている。

2024 年 4 月

フォルマント兄弟（三輪眞弘＋佐近田展康）

※『フレディの墓／インターナショナル』(2009)のコンセプトテキスト、ミュージックビデオ、スコア、関連資料については次をご覧下さい。
http://formantbros.jp/works/25_furedino_mu/